

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や**。**。や** などそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

## 1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 式が厳かに挙行された。
- (2) 歴史を遡って考える。
- (3) 森林を濫伐してはならない。
- (4) 辛辣な批評を受ける。
- (5) 戴冠式に出席する。

## 2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 機嫌をソコねる。
- (2) 立てフダを読む。
- (3) 子供にはトウイ錠が飲みやすい。
- (4) ボクヨウ犬を飼う。
- (5) 湖畔のホテルにトウシユクする。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

「姉」は十七歳で詩の賞を受賞し、第一詩集は高く評価されたが、第二詩集はいい評価を受けなかった。高校生の「わたし」はその「姉」の詩集の評価をめぐって友人と仲たがいをし、いらいらしていた。

香ばしいバターのおいがリビングのほうまで漂ってくる。

わたしはキッチンにとって返し、オーブンの前にしゃがんで中をのぞいた。ガラス窓の向こうで、オレンジ色の光がクッキーをじりじりと照らしている。

この際、バースデーケーキも手作りしてしまおうか。やけくそ気味で、考える。ふつくらしたスポンジケーキを焼いて、いちごと生クリームをたっぷりつけて、まるごとたいらげるのはどうだろう。いや、わざわざケーキを準備する必要もないかもしれない。たかが誕生日に過ぎない。毎年必ずめぐってくるのだから、子どもの頃ならともかく、大騒ぎして祝うほどのものでもない。

つらつらと思いつつも、立ちあがれない。オーブンの熱気で顔がほてる。

たいしたことじゃない。くよくよしなくていい。自分を励まそうとすればするほど、なにもかもうまくいかないような気分にとらわれる。単純に、ひとりぼっちの誕生日がさびしいというだけではない。なんというか、もっと大きく根本的な問題が、わたしの前に立ちあがっている気がしてくる。

がんばっているのに。

そういうふう<sup>(1)</sup>に自分を正当化しようとするのは、ものすごください。かつこわるい。それこそ自意識過剰だと頭では理解しているのに、つ

いひがみっぽくなってしまっているのはどうしてだろう。

十七歳で、姉は詩人になった。片や、わたしはなににもなれていない。姉の詩の評判がよくても悪くても関係ない。わたしなんて、ただの一文書も書けていないのだから。

ぐおん、とオーブンがうなった。温度を調節するためなのか、炎がひっそりなしいついたり消えたりしている。わたしは汗ばんだ額を手の甲で拭いた。

ふいに、泣きたくなってくる。姉にできないことをこつこつと積み重ねようとしたところで、しょせんは自己満足なんだろうか？ そつなく器用に立ち回っても、大切なものは結局なにも手に入らないのだろうか？ それよりもまず、大切なものって一体なんだっけ？

鼻の奥がつんと痛む。いっせ泣いてしまいたいのに、涙は出てこない。かわりに汗が一粒、あごを伝って床にこぼれた。

「いいにおい。」

振り向くと、姉がキッチンをのぞいていた。わたしの横に寄ってきて、同じように床へうずくまる。

姉には、泣きたくなるときなんてないのだろう。

二作目の発売後、両親はこっそり専門誌を買い集め、わたしはインターネットを駆使して、世間の反応を確かめた。意味はないとわかってはいても、そうせずにはいられなかった。<sup>(2)</sup> 姉さえいなければ、と鬱々と思いつめながらも、ざまあみると笑い飛ばせず、好意的な意見をこそこそと探していたあたりに、言ってみればわたしの限界があったのだろう。それにひきかえ本人は達観したもので、家族のむだな試みに加わる気配はなかった。

「もうすぐだね。」

オーブンのタイマーは残り三分を示している。姉のひじが、わたしのひじにふれた。ひんやりと冷たい。

「うん。」

わたしは下を向き、まばたきして息をととのえた。デジタルの数字が健気に一秒ずつ小さくなっていく。

「おめでとう。」

姉がいきなり言った。

「え？」

「お誕生日。」

困ったように首をかしげ、姉は続ける。

「それを言い、来たんだった。蚊にさされて忘れてた。ごめん。」

「蚊のせいで妹の誕生日を忘れるって、どうなのよ。」

わたしはつぶやいた。声がかすれていた。たかが誕生日、祝うほどのものじゃない、とついさっきまで心の中で唱えていたにもかかわらず。

「しかも今日じゃないし。来週だよ。」

「わかってるよ。もうすぐだね、って言ったでしょ。」

姉は弁解し、

「でも、今日みたいな日だったんだよ。」

と続けた。

「よく晴れてて、暑くて、だけど空が青くて気持ちよかった。今朝、急に思い出したの。ずうっと昔のことなのに、はつきり覚えている。」

だって、すぐくうれしかったから。

<sup>(3)</sup> 姉が目を細めてしめくくった。クッキーの焼きあがり知らせる電子音が、キッチンに響き渡った。

こんがりと焦げめのついたクッキーを、姉はもりもりと食べた。顔のわりに横幅の広い口をさらに大きく開き、まだかすかに湯気を立てているハートや星をほおばっている。

「おいしい、おいしい。」

上機嫌で言う。

「ねえ、お菓子屋さんになれば？ になれるよ、これは。」

姉の得意技だ。おだてるでもなく、喜ばせようというのでもなく、なれる、と独断で言い切る。

「なれないって。」

わたしはもう、小学生の頃のように、姉のほめ言葉をうのみにはしない。中学生の頃のように、適当なことを言わないでよと食ってかかったりもしない。特にお菓子屋さんになりたいわけではないし、たまたまこの場でひらめいた思いつきに過ぎないと承知もしている。

それでも心のどこかで、本当になれるように思えてくるのは奇妙なことだ。

「そうかな、なれると思うけどな。このクッキー、おいしくて元気が出てくるよ。」

わたしも、いつか、なにかになれるだろうか。詩人か、お菓子職人か、それとも他のなにかに、なれるのだろうか。

「書いてる？」

わたしは姉に聞いてみた。

「掻いてない。」

姉はもぐもぐと口を動かしつつ、手の甲を顔の前にかざして胸を張った。赤みはだいぶひいている。

「違うよ。」

ふきだした拍子にクッキーの粉がのどにつかえ、わたしは軽くむせた。姉が差し出した牛乳をひと口もらって、言い直す。

「詩、書いてる？ 最近。」

「ええと。」

姉の声が小さくなった。

「あんまり、かなあ。」

弱々しい口ぶりにぎよつとした。姉らしくもない。

「いっばい書きなよ。」

なにかにせきたてられるように、わたしは言った。それだけでは足りない気がして、クッキー差し入れるよ、とつけ加える。

「元気が出てくるような、おいしいやつ。」

わたしには専門的なことはよくわからない。姉をかばうつもりもないし、正直に言つて、姉の詩がどう優れているのかも説明できない。ただ、わたしが読む限りでは、二冊の詩集のどちらにのつている詩も、等しく姉の声だった。文字を追っていると、耳もとでささやきかけられている気がした。散歩中になにかおもしろそうなものに出くわしたとき、いつもそうしてくれたように。

姉はたぶん、目に映つたものを無心に綴つづっているだけだ。そこによけない感傷はない。退屈も、憂鬱も。

「ねえ、書きなよ。いっばい食べて、力つけて、どんどん書きまくりなよ。」  
(4) さらにたたみかけた。ぼかんとして聞いていた姉が、真顔になつて口を開いた。

「いらいらしてたほうが、よく書けるってこともあるらしいよ。」

もうふだんの穏やかな声に戻っている。今度はわたしがぼかんとする番だった。唐突に、さつき思い出していた編集者との電話の、続きがよみがえった。

申し訳ありません。彼女は深刻な声で謝っていた。わたしがお姉さんを追いつめてしまったのかもしれない。はっぱをかけるつもりだったんですけれど、行き過ぎたことをしてしまって、反省しています。

彼女は姉に、ちよつとしたお説教をしたらしかった。多少たたかれたからってへこたれるなんて甘い、と。みんな決死の覚悟で、それぞれの目標に向けて、身を削つて真剣に書いている。大切に守られてきたあなたにはわからないかもしれないけれど、生き残りたいと思うなら自力で

がんばるしかない。詩でも、なんでも。

姉はひとの話を開かない。常に本能を頼りに動く。だから、そこまで深く考えてひとり暮らしをはじめたとも思えない。でも、自分と自分の詩を慕う編集者の声が、まったく届かなかったはずもないだろう。

「現状に満足できないくらいがちょうどいいってこと？ 足りないものがあつたほうが、見えてくることもあるのかな？」

彼女に聞きそびれたことを、わたしは姉に言つてみる。

「そうなの？ よくわからない。」

姉はあつけなく受け流し、クッキーをかじっている。なんだか抽象的なことを口にしてしまったのが急に気恥かたじけずかしくなつて、わたしは話をそらした。

「そういえば、プレゼントは？ お祝いに来てくれたんでしょ？」

「え？」

案の定、姉は狼狽ろうたひした様子で目を泳がせた。

(瀧羽麻子「ぱりぱり」による)

〔注〕編集者との電話——編集者は、電話に出た「わたし」を「姉」

だと勘違いして、早く詩を書くように言い立てた。

〔問1〕<sup>(1)</sup> それこそ自意識過剰だと頭では理解しているのに、ついひがみつ

ばくなってしまうのはどうしてだろう。とあるが、ここでの「自意識過剰」の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 姉が詩人として世間で広く認められているのを羨ましく感じるために、自分も姉のように有名になるということを意識しすぎているのだと「わたし」には思えること。

イ 姉のように世間の評価を受けていないけれども、悩みながらもがんばっているのだと考えることが自分で自分を意識しすぎているのだと「わたし」には思えること。

ウ 姉が詩人として成功しているのに対して、自分も菓子作りの道で成功したいと考えるのが自分を意識しすぎることと直接つながっていると「わたし」には思えること。

エ 誕生日は重要な意義を持つものなのに、それより考えるべき大きく根本的な問題があるのだと自分を意識しすぎることがかえって不幸だと「わたし」には思えること。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 姉さえいなければ、と鬱々と思いつめながらも、ざまあみろと

笑い飛ばせず、好意的な意見をこそこそと探していたあたりに、言ってみればわたしの限界があったのだろう。とあるが、「わたしの限界」の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 姉のことを考えて、その詩の才能に注目していこうとしながらも、つつい自分の将来のことばかり考えてしまうこと。

イ 姉のことを好きだと思い、その気持ちを隠そうと努力しながらも、つつい姉に対する愛情が行動に表れてしまうこと。

ウ 姉のことをうとましいと思ひ、自分には関係ないと思ひながらも、つつい姉のことを無視できずに考えてしまうこと。

エ 姉のことを嫌いだと考へ、姉などいなければいいと思ひながらも、つつい自分より姉の幸せの方を考へてしまうこと。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 姉が目を細めてしめくくった。とあるが、なぜ「姉」は「目を細め

たのか。その理由を五十文字以内で書け。

〔問4〕 さらにたみかけた。<sup>(4)</sup>とあるが、このときの「わたし」の心情と

して最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 姉の詩のどこが優れているのかは分からないけれども、そのよさを見  
きわめて姉を励ましたいと考える心情。

イ 姉が詩を書けずに弱々しい口調になっているのに同情し、生きがいで  
ある詩作へと姉を導きたいと願う心情。

ウ 姉が詩を書けないのが自分のせいのような気分になり、がんばらせる  
ためにお菓子を作ろうと決意する心情。

エ 姉の詩は紛れもなく姉の心の言葉だと思い、姉が行き詰まっている様  
子を見て応援せずにはられない心情。

〔問5〕 「わたし」から見た「姉」の様子について述べたものとして最も適

切なものは、次のうちではどれか。

ア 自分の決めたことにこだわることなく、そうかといって他人の意見を  
受け入れることもせず、かたくなに世間と隔たりを保ちながら詩作に  
努めている。

イ 頑固で融通がきかないが、温かい思いやりを持って周囲のことを常に  
気にかけて、自分を取り巻く全てのものに深い愛情を注ぎながら詩を  
作っている。

ウ 自分のことばかりにあくせくと苦労するような平凡な人間ではなく、  
超然としていて自分の思いに素直に従って行動し、無心になって詩を  
書いている。

エ 豊かな感性を持ち、独善的にならないように他の人々の批評を受け入  
れながらも、自分の理想とするものの全てを詩に注ぎ込もうと情熱を  
傾けている。

4

は次のページから始まります。



次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

都市の自然環境を守るためには、周囲から進入してくる開発に対抗しなければならぬが、そのためには、それを守るためのコンセプトが是非とも必要である。「里山」というコンセプトは、開発を後押しするコンセプトに対抗して生み出されたものであり、都市周辺の自然環境保護にとって重要な力を提供している。ちょうどそのように、都市内部の自然を守るためにも、そのようなコンセプトが必要であろう。このような意味でも、空間を「場」という点から把握することが意味をもつように思われる。

「遊び場」とは、「こどもたちの遊ぶ空間」である。一九六〇年代には、都市公園のなかにたくさんの「児童公園」がつくられたが、こどもたちがほとんど遊びに来なかつたので、「街区公園」と改名されたことがあった。<sup>(2)</sup>「児童公園」は「遊び場」にならなかつたのである。「こどもたちの遊ばない遊び場」というのは、論理矛盾であるが、「こどもたちの遊ばない公園」は現実存在する。つまり公園の形はしているが、遊び場になつていない公園という意味である。「場」とは、人間の行為や意識と空間との関係において成立するものである。空間がどのような場を含んでいたかは、その空間と関わった人びとによつてはじめて明らかにされる。

昔、京都には「すいば」という概念があつたという。これは男の子たちが自分たち固有の遊び場とした空間のことである。そこで、こどもたちは、クワガタムシをつかまえたり、トンボ釣りをしたりすることができた。「すいば」とは「好き場」とも「粋場」ともいわれ、戦後の高度経済成長に伴つて消滅したが、その代わりに、こどもたちは、そのような空間を「秘密基地」と表現するようになった。「すいば」とは特定の

行為をするための機能空間ではない。それはこどもたちが「やりたいことをやる空間」、大人の見識から隠れて「好きなことができる空間」であつた。「秘密基地」の「秘密」というのは、大人の目から秘匿されているという意味である。

日本の戦後の都市開発は、こどもたちからそのような秘密の行為のための空間を奪つたプロセスとして見る事ができる。戦後残つていた「原っぱ」という場もそのような多機能的な場を表現するものであつたが、近代化に伴う空間の機能化、さらには、単機能化は、空間のもつ多彩な場の存在を許容することができなかつた。

「すいば」という場の概念は、ほとんど忘れ去られた。<sup>(3)</sup>記憶のなかに残されていたこのような概念の重要性を再認識したのは、このことばの重要性に気づいたわずかな人びとである。近代化の過程でコンセプト優位の空間再編のプロセスで場の機能とその記憶が失われていくということは、空間のもつ多様性が、すなわち、豊かさが失われることである。空間の豊かさを喪失させるという作用をコンセプト化作用がもつていたとすれば、空間の豊かさの再認のためには、空間がどのような場として機能していたかを人びとの記録や記憶のなから取り出すほかはない。

では、空間の多様性をどのように掘り起こせばよいのだろうか。問題になつてくる空間でさまざまな行為をする人びとやその空間に関心をもつ人びとによつて、そこがどのような場であるかを尋ねるといふことがその重要な手続きであろう。場の多様性はじつはそこに関わる人びとの行為の多様性であり、人びとの行為の基礎となる意図や目的、あるいは意識の多様性である。空間の多様性は、じつは、人間的行為の多様性なのである。人間的行為の多様性についての認識を欠くことによつて、空間は、特定の視点からしか認識されないことになる。

空間の多様性の根柢となる人間的行為の意図や目的、意識の多様性は、当然のことながら、そこに暮らす人びとの習慣や教育など文化的側面を

色濃く反映している。文化は、地域や世代によってさまざまな様相を示す。「すいば」は、京都の特定地域の特定世代の男の子たちだけが使った概念であったという。この概念そのものが地域性に彩られた地域文化のなかでの行為の目的を表現するものであった。

空間の多様性が文化的要素の多様性でもあるのは、空間のうちに人びとの行動様式とその結果としての作品が現れるからである。描くという行為なしには絵画は存在しないし、演奏するという行為なくしては、音楽は成立しない。描くという行為も演奏するという行為も身体によって行われる行為であり、身体的行為は同時に空間的行為でもあるから、描くことや奏でることがどこで行われるか、どのような構造をした空間で行われるのかによって、その成果も異なってくる。<sup>(4)</sup>空間が文化を根幹から規定するのは、このような理由によるのである。

以上のように、都市空間の問題は人間の行為の問題と行為の基礎にある歴史的文化的脈絡へとつながっている。都市を豊かな空間として形成するためには、そこに生きる人びとの多様な意識とその基盤となる歴史や文化から考えはじめなければならない。

豊かな空間の形成には、そこに生きる人びとの行為を規定する目的や意図を考慮することが不可欠であると述べた。しかし、目的や意図は、行為の空間に組み込まれた空間の機能によって規制される。空間の機能を決定してきたのは、その空間に関わった人びとであり、その人びとが行ったさまざまな行為である。このような行為の総体が空間に組み込まれた歴史であり、文化である。わたしは、現在に残るそのような機能を「空間の履歴」と表現するが、空間に刻まれた履歴に関わることで、わたしたち自身の履歴も形成されるのである。したがって、空間の履歴は、空間の歴史性であるということもできる。この歴史性のもとでわたしたちは、自分自身の歴史性を確認する。

空間の履歴とは、その空間に関わる人間の行為の基盤である。行為は

未来へと目を向けるわけであるが、空間は人間の行為の可能性を未来に向けて拓く。未来と過去を結ぶのが空間の履歴である。履歴は過去に由来し、現在に属し、未来に開かれている。人間に行為の自由を保障するのも空間の履歴である。

(桑子敏雄「風景のなかの環境哲学」による)

〔注〕コンセプト——全体を貫く統一的な考え方。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 空間を「場」という点から把握することとは、どういうことか。

次のうちから最も適切なものを選べ。

ア その空間に関わる人や関心をもつ人によって、どのような場所として決定されているのかを重視すること。

イ その空間がどのような目的で使用されるかを的確に見据え、一つの目的に対応する場所として捉えること。

ウ その空間が過去にどのように使われてきたかを詳細に調べ、その中から地域に最適な使い方を考えること。

エ その空間内部の自然と人との関係に注目し、都市の自然環境を破壊せずに守ることを基本としていくこと。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 「児童公園」は「遊び場」にならなかったのである。とあるが、それはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 公園は誰にでも開放されている場なので、自分たちの固有の遊び場を望んでいることもたちには受け入れられなかったから。

イ 遊び場というものは子どもたちが自由に行動できる空間だが、児童公園は大人によって管理された空間でしかなかったから。

ウ 児童公園は公園としての一つの機能は有していたが、子どもたちが様々な行動のできる場を提供するものではなかったから。

エ 児童公園は作られた空間で規制も多かったので、子どもたちが昆虫を捕まえられる自然を提供することができなかったから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 記憶のなかに残されていたこのような概念の重要性を再認識したのは、このことばの重要性に気づいたわずかな人びとである。と

あるが、「わずかな人びと」が気づいた「重要性」とは、どのようなことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 失われた空間の豊かさを回復するには、「すいば」がどのような場として機能していたかを人びとに尋ねることから始めていけば可能であるということ。

イ 好きなことができる「すいば」のような場所には特定の行為のための空間にはない豊かさがあり、それぞれの地域の文化が反映されていたということ。

ウ 「すいば」のような空間にあった特定の機能とその記憶が失われてしまった原因は、近代化に伴うコンセプト重視の空間再編に求められるということ。

エ 「すいば」ということばが特定の視点からしか考察されなくなって忘れ去られたのは、人間の行為の多様性についての認識が欠落した結果だということ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> 空間が文化を根幹から規定するのは、このような理由によるのである。とあるが、「空間が文化を根幹から規定する」のはなぜか。その理由を七十字以内で書け。

〔問5〕本文の内容に合致するものとして、最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 「里山」というコンセプトは、自然を破壊する開発に対抗するために作られたものであり、都市内部の自然環境を保護するためには有効な考え方である。

イ かつて京都にあった「すいば」のようなこともたちが自分のやりたいことを自由にできる空間は、現在の都市にも決して欠かすことはできないのである。

ウ 豊かな空間とは、先人たちが蓄積してきた空間の履歴を認識しながらも自由な営みが可能で、その営みによって未来へつながることができる空間である。

エ 人間は空間に刻まれた履歴に関わるという形で過去と関係し、その空間を次の世代へそのまま受け渡すことで未来と関わって、歴史に参加するのである。

〔問6〕日本の戦後の都市開発は、こともたちからそのような秘密の行為のための空間を奪ったプロセスとして見ることができるとあるが、「戦後の都市開発」を筆者はどのようなものだと捉えているかを簡潔にまとめ、それに対するあなたの考えを、身近な具体例を挙げながら二百字以内で書け。なお、や・や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

5

は次のページから始まります。

## 5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( )内は、本文中に引用されている和歌の現代語訳を補ったものである。なお、\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。

部屋のなかにいて窓から外を見るとき、微動と静止、弛緩と硬直が交互に襲ってくるような感覚は、いったいどこから降りてくるのだろう。晴れていても曇っていても、昼でも夜でも、窓を介して外の景色を眺めていると、たとえば肘掛け椅子に深々と腰を下ろしてほんやり天井を見つめていたりするのはまったくちがう種類の感覚に襲われることがあって、風景を味わうのではなく、窓の前(1)に居ることじたいを味わっているような気がしてくるのだ。

採光、もしくは換気という機能を与えられた窓は、なぜかその機能以外の力で私に働きかける。外へ出る、内にこもるな、その場の気の張りを失うなど訴えるかと思えば、よくここまで来た、ここまで来れば十分だといった意味不明の慰めを送ってきたりもする。これは危ない、身心のバランスが崩れているのかもしれないと不安になることもしばしばだが、冷静に振り返ると、それは病的な幻聴ではなくて、あくまで自分の内なる声なのだった。つまり私がなにかに感応したのであって、なにかが私のどこかを狙ってじかに訴えてきたのではないのである。窓の前(2)に居ること。立っていても、坐まわっていても、窓の前(2)にいて視線を外に向けていると、いつか、かならず、なにかが起きるのではないかと思わずにいられない。

ただ四角く刳り貫かれていてはだめなのだ。窓と壁の余白の割合や、視野の広がり方、そして窓を窓たらしめているガラスの質感や視点など、さまざまな条件にこちらの精神状態がうまく合致したとき、窓は窓という規矩\*きくを押しつけることをやめ、真の意味で開かれた窓になるのではないか？

高校生の頃、大岡信の「窓をのぞく」と題された一文(『青き麦萌ゆ』)に触れて、私は『万葉集』の一首を教えられた。巻の十一と記されているだけの引用歌を図書館で探し当てたとき、大判の書籍を入れる低い書棚の上の、補填材が軟化した重い旧式のサッシガラスを透かしてところどころ歪ゆがんで見える体育館の壁が、暮れかけた陽の光を照り返していた。体育館の天窗は水銀灯で白く輝き、その朱と白銀のコントラストが妙に不釣り合ふつりあいである。風はなかった。体育会系クラブの奇妙な掛け声と、合唱部のパート別練習の、まだ完全には揃そろっていない声がかすかに聞こえていた。

巻の十一に収められている二六七九番の歌、「窓越しに月おし照りてあしひきの風吹く夜は君をしそ思ふ」も、その窓を異なる窓に変容させることはできなかった。代わりに、私の頭のなかには、天平時代の、ガラスなど嵌はめられていない窓の木枠を透かして入ってくる月の光に照らされ、嵐の音を聞きながらいとしい人を強く深く思うひとりの女性の姿が浮かび、期待していたのとは異なる文脈で心を揺さぶられたのである。窓。古語辞典の定義によれば、窓とは、(マ)目(門)の意で、「室外を見、室内に明りや空気を入れるための小さい口」となっている。そこにはかならず、「目」の働きが入るのだ。万葉の歌で窓を意識してから、(2)当時惹かれていた式子内親王の歌にもしばしば窓が詠み込まれていることに、自然と「目」が移るようになっていった。

- A みじか夜のまどのくれ竹うちなびきほのかに通ふうたたねのあき  
 B 冬くれば谷の小川のおとたえてみねのあらしぞまどを問ひける  
 C 秋の夜のしづかにくらきまどの雨うちなげかれてひましらむなり  
 D まどちかき竹の葉すさぶ風の音にいとどみじかきうたたねの夢

A 夏の短い夜の窓辺に見える呉竹が風になびいて、うたたねをし  
ている私に秋がほのかに通つてくるのがそれと気付かれる。

B 冬がくると、谷の小川の音は、氷こおってしまったためにすっかり  
とだえて、その代わりに音がするものとは、峯みねの嵐が窓を訪れ  
吹く事だけであるよ。

C 秋の夜の静かに暗い中に降る窓の雨が、(窓を)打ち、それによっ  
て自然と嘆いているうちに白々と夜が明けてきたようだ。

D 窓に近い竹の葉に吹きすさぶ風の音によってめざめ、(そうで  
なくても短いのに)ますます短いうたたねの夢であるよ。

(「式子内親王全歌注釈」による)

これら数首を抜き出してみて明らかなのは、二首目を除けば、いずれ  
も場面が夜になっていることだ。「万葉集」の歌の舞台も、夜、月、嵐。

(3) しかし先の歌のうたいぶりは、内親王のそれと比べるとはるかに強い

「あくがれごころ」、すなわち陽性の抒情が前面に出ている。かたや式  
子内親王の歌には、「窓」の「一語こそあれ、そこに「見る」という積  
極的な行為がなぜか感じられない。「室外を見る」という一点において  
も、窓は心の状態をはっきり表現してしまうために、ちょうどリルケ晩  
年の詩集『窓』のようにひとつの象徴として作用することがありうるの  
だが、式子の四首からはそうした問題は削がれているようなのだ。彼女  
は視覚より聴覚で世界を吸い込んでいく。「窓」はそこで、「見る」「眺  
める」ものである以上に、「聴く」ためのものだったのではないだろうか。

窓を覗くのではなく、窓から見のでもなく、「窓を聴く」ということだ。  
聴覚を鍛えることは、結局のところ視覚の精度を上げることと同義で  
ある。研ぎ澄まされた聴覚の網に、像が浮かぶ。像というよりほのかな  
光そのものが浮かび、聴覚を超えたところで焦点が結ばれてしまうのだ。  
あるいは逆に、像が結ばれたとき、その隙間から、「ひましらむ」の「ひ  
ま」から音が聞こえてくる。竹と風という主題には、家持の「わが屋戸  
のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも」などを想起することも  
できるだろう。

しかし、それはそれとして、窓とはいったいなんだろうか？ 見たり  
眺めたりするための装置ではなく、「聴く」、あるいは「聴いてしまう」  
ものだと説いても、それはとりあえずの回答にすぎない。窓について考  
えるたびに私は戸惑う。それどころか、とまどう、という音のなかに「ま  
ど」の響きを聞いてしまうのだ。戸惑う窓。そう、主導権は窓に渡して  
おけばいいのである。私が悩むより、窓そのものに悩ませておいた方が、  
身心の健康にはずっといいだろうから。

(堀江敏幸「戸惑う窓」による)

〔注〕規矩——手本。規則。

リルケ——オーストリアの詩人。

わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも——  
わが家のいささかの群竹に、吹く風の音がかすかに聞えるこ  
の夕方である。(「日本古典文学大系」による)

〔問1〕<sup>(1)</sup> 風景を味わうのではなく、窓の前にいることじたいを味わっているような気がしてくるのだ。とあるが、筆者が「窓の前にいることじたいを味わっているような気がしてくる」理由として、次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 窓の前において、視線を外に向けることによって感性が鋭敏になって、様々な思念が自然に心の底から浮かび上がってくるから。

イ 窓の前において、光や風に触れると感受性が豊かになって、今まで解決できなかった悩みに対する的確な答えが導き出せるから。

ウ 窓の前において、邪念を払い精神を統一すると、自分を苦しめていた問題が小さなことに思えて人生の新しい展望が開けるから。

エ 窓の前において、目を閉じて心を静かに開放すると、自分を束縛していた習慣から自由になって人生を楽しむことができるから。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 当時惹かれていた式子内親王の歌にもしばしば窓が詠み込まれているとあるが、「式子内親王の歌」の四首に共通するうたいぶりを、筆者はどのように考えているか、五十字以内で書け。

〔問3〕<sup>(3)</sup> しかし先の歌のうたいぶりは、内親王のそれと比べるとはるかに強い「あくがれごころ」、すなわち陽性の抒情が前面に出ている。とあるが、「陽性の抒情が前面に出ている」のは、「窓越しに月おし照りてあしひきの風吹く夜は君をしそ思ふ」の中のどの句か。和歌の中からそのまま抜き出して書け。



〔問4〕<sup>(4)</sup>「語こそあれ」とあるが、これを言い換えた表現として、次のう

ちから最も適切なものを選べ。

- ア 一語があるので、
- イ 一語はあるはずで、
- ウ 一語はあるけれども、
- エ 一語があつてほしくて、

〔問5〕 筆者にとって窓とは何か。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 継続的に視界を確保しながら、周囲の自然の音に神経を傾けることによつて、外の世界の仕組みや動きを把握できるところ。
- イ 意図的に思考力を働かせなくても、耳を澄ませて受け身に徹することによつて、自分の内面と向き合うことのできる場所。
- ウ 能動的に考えを深め、周囲の環境に五感を張り巡らせることによつて、どんな状況の変化にも対応できる準備をすること。
- エ 消極的に受けとめるのではなく、常に前向きに取り組もうとすることによつて、今までと違う新しい自分を創り出すところ。

# 解答用紙 国語

の部分には、何も記入しないこと。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

1	(1) 厳(か)	(2) 週(つて)	(3) 濫(た)	(4) 辛(は)	(5) 戴(か)
	か	て			

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

2	(1) ソコ(なる)	(2) フタ	(3) トウイ	(4) ボクヨウ	(5) トウシエク
	なる				

1	2
3	4
5	

3	問1		問2	
	問3			
	問4		問5	
	50			
	20			

1	2	3
4	5	

4	問1		問3	
	問2			
	問4			
	70			
	60			

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

4	問6																			

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

5	問1				
	問2				
	問3				
	問4		問5		
	50				
20					

合計得点	
------	--

受検番号	
------	--

25  
100  
200